

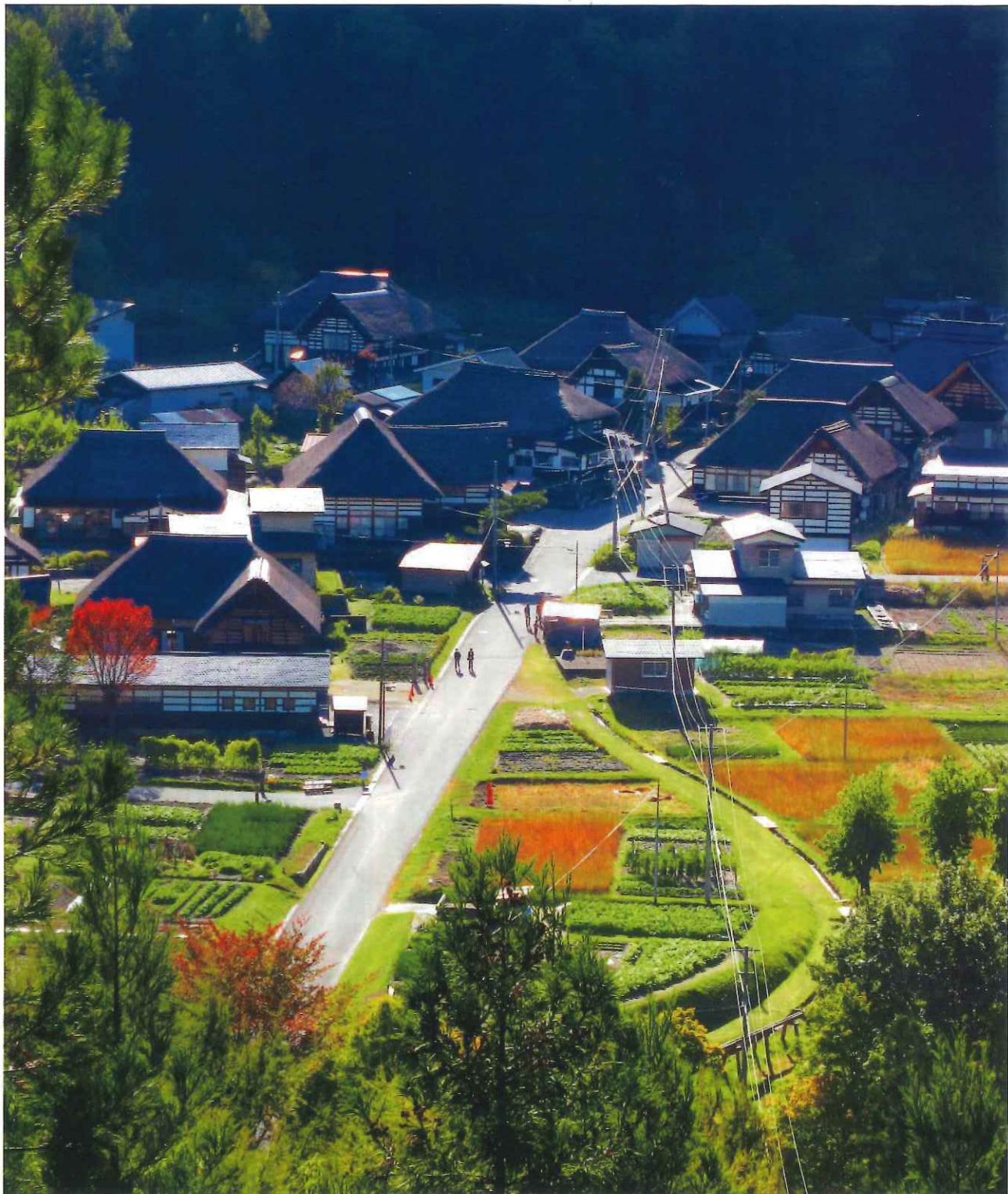
# 民家

日本の民家を次代に引き継ぐ

2016  
No.96

季刊 冬

1月1日発行



特定非営利活動法人（認定NPO）  
日本民家再生協会

# 酒蔵など4棟を 環境に配慮した 社屋、工場として再生

## 民家再生事例

佐賀県佐賀市[サガ電子工業]

設計・施工 夢木香



南側外観 手前が事務所棟、門を挟んで右側が作業棟I 真っ白な漆喰と黒く仕上げたスギ板鎧張りのコントラストが美しい

佐賀市街から車で20分ほど走ると、のどかな田園地帯に酒蔵と米蔵・納屋を移築再生した建物が姿を現します。それは無線通信用アンテナなどを製造するサガ電子工業の社屋と工場です。はじめて訪れる際に住所を調べ、ホームページで建物を見ていても、「ここではない」と思い通り過ぎてしまふ人もいるそうです。

設計・施工に取り組んだ夢木香の松尾進さん（JMRRA会員）の案内で訪ねました。蔵が工場としてよみがえる、全国初とも言える再生事例を紹介します。

### 自然な環境の中で 仕事がしたい

サガ電子工業は小柳謙治社長の父、襄治さんが設立し今年で41年目を迎えた。1996年に会社を受け継いだ小柳さんは、当時の工場が住宅地にあったことと、建物や設備が古くなっていたため、何度も建て替えや移転を考えたが、決断までにはいたらなかつた。

小柳さんは42歳のときに（2008年）がんがみつかり、残りの人生はちょっとテンポをゆるめた生き方をしたいと考えが強くなつたそうだ。

「今はストレス社会なので、ほつとする場所が必要です。1日の3分の1は仕事をですから、エアコンでキンキンに冷えて寒い思いをしたり、カラカラに乾いた熱風のなかで仕事をするのではなく、なるべく自然な環境の仕事場ができるないか

と考えるようになりました」。さらに「酒蔵に入れてもらつたことがあります。ひんやりとしてすごく快適で、古い床板もすてき、ここでアンテナの組み立てができるなら幸せだろうなと思ったことがあります」と話してくださいました。

そして2011年3月の東日本大震災、原発事故によって始まつた「節電」に直面し、あらためてエネルギーの使い方を考えるようになつたと言ふ。2か月後、たまたま知人に紹介されて

民家を移築再生したカフェに入り「これだ！」と直感する。さつそくホームページで検索し、鹿島市で民家再生を手がける夢木香が目にとまる。一日散に事務所を訪ね、こういうことがしたいんだと話があるからと、すぐに見に行くことに。

武雄市の築100年を超える2棟の酒蔵と、西有田町の築80年の米蔵と納屋を見て決意する。「古さについては、とことん古かつたので心配を通り越してしまつた。できるできないの感覚はなかつたですね」。

最初は予算を考え、工場だけを蔵にして事務所はプレハブでつくるうと考えたが、それでは意味がないと思い直し、4棟すべてを生かすことに決めた。さらに企業立地促進法を使うと土地も税制優遇を受けられるため、分譲が始まつた工業団地に移転を決めた。その年の11月には契約、12月には蔵の解体工事が始まつた。



門の左には佐賀市景観賞のプレート、右側には納屋の鬼瓦を掲げている



古瓦をところどころに敷いた中庭を挟んで右側が事務所棟、正面奥と左側が作業棟Ⅰ。4棟を配置するにあたり、建物、腰壁の高さやバランスなどに配慮している

**■出荷棟**  
庄屋の築約80年の  
米蔵を移築  
面積：154.03m<sup>2</sup>



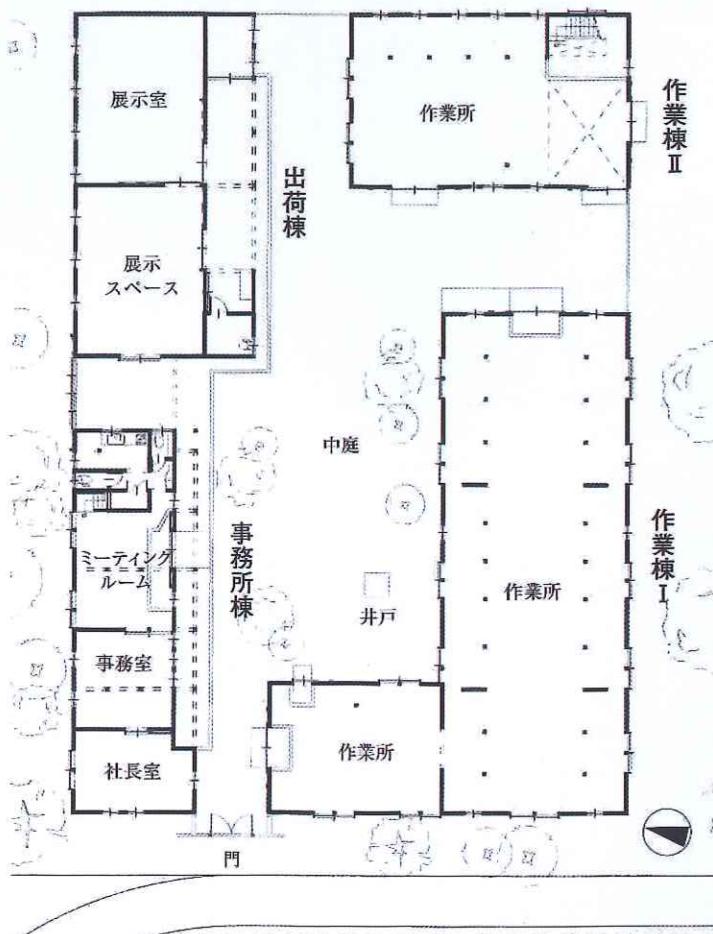
移築前

**■事務所棟**  
庄屋の築約80年の  
納屋を移築  
面積：1階 93.61m<sup>2</sup>  
2階 69.66m<sup>2</sup>



移築前

[サガ電子工業 社屋、工場]  
設 計：夢木香  
施 工：夢木香  
構造規模：木造一部2階建て  
建築面積：690.86m<sup>2</sup> (4棟合計)  
延床面積：809.23m<sup>2</sup> (4棟合計)  
竣 工：2013年4月



**■作業棟Ⅱ**  
酒造会社の築100年を  
超える酒蔵を移築  
面積：1階 117.61m<sup>2</sup>  
2階 90.38m<sup>2</sup>



移築前

**■作業棟Ⅰ**  
酒造会社の築100年を  
超える酒蔵を移築  
面積：280.93m<sup>2</sup>



移築前

**●新しい材料と職人も地産地消**  
酒蔵、米蔵、納屋を丁寧に解体して柱・梁ができる限り生かし、竹小舞に土壁、そして漆喰で仕上げ、瓦を葺いています。「時間がかかりましたが、これをしないと意味がないですから」と小柳さん。「この蔵で、新たに使った木材はほとんどが佐賀県産材のスギ、製材もうちの工場で行いました。地元佐賀の大工さん、左官屋さん、瓦職人さんや電気屋さんを含め延べ5000人が蔵の再生に携わっています。そういう意味でも地産地消なん

●再利用可能なものはできる限り使う  
移築再生にあたり、小柳さんは使える材料はできる限り再利用するという方針を決め、松尾さんもそれに応えた。「捨てるものはほとんどありませんでしたね。使わなかつたのは木材の悪くなつたものくらい。それも冬場に暖をとるための燃料として使いました」。  
蔵の東石や1万枚の瓦も中庭や外構で役目を果たしている。瓦のほとんどは小柳さんみずから配置を考え運んだそうだ。納屋の基礎石は新しく掘った井戸のまわりを囲む。このあたりは深さ120mくらいのところに地下水が流れていって、工場ではこれを水クーラーとして冷暖房に利用している。

—再利用と地産地消で—  
**蔵を再生**

\*水クーラー：井戸水をファンコイルユニット(水熱源の熱交換器)に通し送風機で送風する、比較的小型で簡易な空気調和機。

## 木材の再利用

築80年の米蔵・納屋を出荷棟・事務所棟に  
柱・梁の状態がよく、出荷棟と事務所棟の間を狭くした程度で再生した。



傷んだ柱は根継ぎなどをして再び使用している。

## 土・竹・瓦の再利用

壁土は古いものと新しいものを半分ずつ混ぜ合わせて再利用。竹木舞の竹もしつかりした竹は再利用し、地元の竹林からも調達している。古瓦は全部で1万枚ほどあったが、すべて敷地内の外構などに再利用している。



## 壁塗り体験

古い土と新しい土に酵させた土で、近隣の小学1年生、2年生が土壁づくりに挑戦。竹で編んだ木舞に泥団子を練り込む。パートの人たちも自社工場の壁づくりを楽しむ。



### 荒壁、中塗り、漆喰塗り

荒壁、中塗り、漆喰塗り  
現場で漆喰を練る

ですよ。エネルギー量の計算はできませんが、環境にいい建物ができたと思います」と松尾さん。

地域の小学生を招いて土壁ワークショップも開催した。パートの人たちも竹木舞の作業や土壁づくりに参加した。

## 省エネ・省資源を実践し 藏造りの景観を実現

● 工業団地にランドマークが誕生

社屋と工場は2013年春に完成し、工業団地に新しい景観を創りだした。建物のまわりには薪ストーブ用の薪を積んでいるため、材木屋だと思う人や、ここで喫茶店をしたらいいなど夢を見る人もいるそうだ。

さらに「蔵のもつ調湿・調温機能を最大限に生かして省エネ、省資源といった先駆的なエコ活動を実践しながら、時代を経た蔵を利用した美しい景観を創造した」として第17回佐賀市景観賞を受賞している。

### 電気エネルギーの使用を減らす

前の工場のときには大容量のエアコンを使っていたが今は使っていない。18cm厚もある土壁の調湿効果により、夏場の蒸し暑さを快適に抑え、水クーラーと天井扇でも涼しく過ごせる。事務所の窓に取り付けたエアコンは、猛暑の日中に数時間使うくらいで済んでいる。

冬も「前の鉄骨造の工場は、朝会社を開けたら10℃くらいで、昼には24℃、ま



作業棟I 酒蔵の小屋組、11本のみごとな梁をもとのまま生かした約25m×9mの空間。柱はほとんど傷んでいたため地元のスギに取り替えている

た夕方にはぐつと冷え込むように大幅な室温の変化がありました。それに比べて土蔵は朝20℃だつたら夕方までずっと20℃です」と小柳さんは土壁の調温効果も実感している。

夕方、仕事帰りのパートの方にも話を聞いた。「前の工場は部屋を密封していたので空気が淀んでいたように思います。ここは天井が高くて広いのでとても楽になりました。夏のはじめも割と涼しく、冬は薪ストーブと水クーラーの風だけですが過ごしやすいですよ」。

松尾さんも「100年前の人びとがつくった建築を受け継ぎ、自然素材を利する技術は、環境に負担をかけないものですね。そういう建物を小柳社長とつくりあげることができました」と話してくださいました。

#### ● 建物が会社の取り組みを表す

去年の売上げは小柳さんが社長になって過去最高となつた。技術力はもちろんだと思うが蔵の効果もあるのだろうか。「蔵にした効果は想像以上にあると思します。お客様が東京から見学に来てくださいますが、みなさんここまでやると帰ります。しかしながら別のお客様を連れてくるんですね。そうしたことから次につながることもあります。私たちが取り組む姿勢を見ていただくことが一番だと思います」。また、「2015年の新卒の中には『蔵が好きなんですね』と言つて、車で1時間かけて



出荷棟 納屋に使われていた垂木を格子状に組んで照明を設置



作業棟Ⅱ 建物の周囲には冬に備えて薪が積まれている

仕込み用の大桶を吊り上げる  
滑車(阿弥陀車)

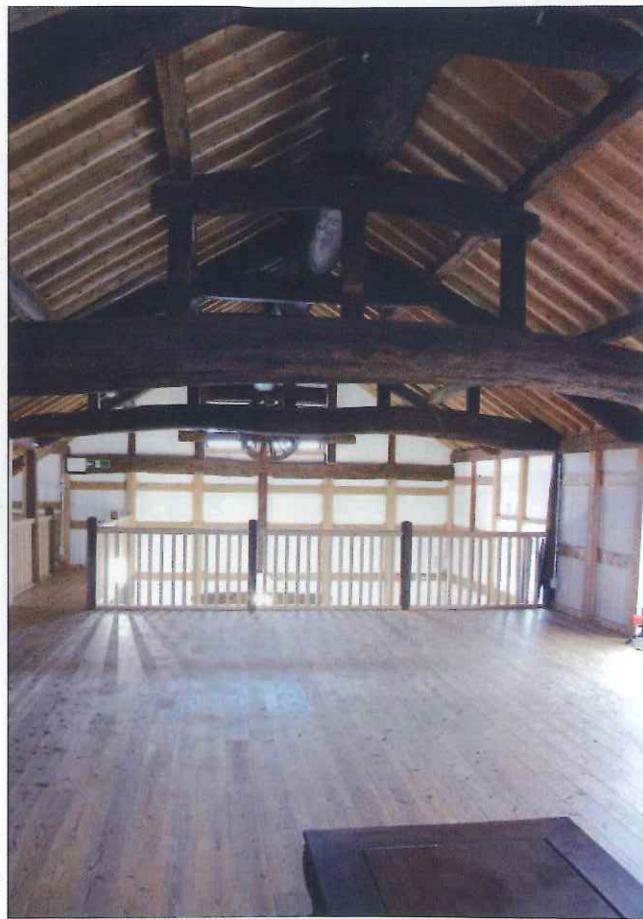
重厚な染と漆喰に包まれ落ち着いた雰囲気の事務所棟



酒樽の蓋を休憩室のテーブルに



小柳謙治さんと松尾進さん



一部吹抜けにした作業棟Ⅱ  
土壁は電波を反射しないことがわかり、アンテナ製品の社内検査にも使用している（コンクリート造や新建材の建物は電波を反射するため、無反射の電波暗室などを設置しないとテストができない）

最後に小柳さんに、再生を実現して2年半を経た今の思いを聞いた。「ものづくりの基礎にあるのは職人の技だと思います。多くの人びとの手によってここができました。職人がいなくなってしまったらこのような素晴らしい建物が作れなくなってしまいます。ぜひとも次の世代に残していくなくては。それは、ものづくりをしている私たちにとつても共通することです」。

通勤している人もいるそうだ。

テレビや新聞でも循環型社会に取り組む会社として取り上げられるなど、知名度も上がった。

## 次の世代に残すために

松尾さんは今回の再生をあらためて振り返る。「伝統的な日本の建築は、作るときにほとんどが人力です。解体するときにもエネルギーはそれほどいらないんです。今回はさらに、ほとんど廃棄物が出ませんでした。出たとしても土に還ります。しかし省エネの機器は、作るときには必ずエネルギーが必要です。住宅も省エネといいますが、ゼロにはなかなかできません。最終的に廃棄するときにもエネルギーを使います。昔の人の知恵というのは素晴らしい、そして環境にもいい。これからも、このような建物を壊さずに残していきたい」。